

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

認知言語学的観点に基づく英語条件文の分類と特徴づけ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 英語条件文, コントロール, サイクル, 学習英文法, 認知言語学 キーワード (En): 作成者: 長友, 俊一郎 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006018

認知言語学的観点に基づく英語条件文の分類と特徴づけ*

長 友 俊一郎

要 旨

これまで条件文は、様々な観点に基づいて分析されてきており、条件文に対する捉え方は多岐に渡る。他方、科学文法がいかにして言語学習、教授法、言語習得の分野に貢献できるかが近年論じられている。岡田 (2001: 6-7, 2012: 119) や大津 (編) (2012) では、(i) 科学文法などの成果を積極的に取り入れ、今までばらばらに扱われてきた事実を統一的に説明する、(ii) 形を公式的・機械的にひたすら暗記させるのではなく、意味や認知メカニズムから説明することにより、学習者を納得させる、(iii) 英語学習者に英語の仕組みの骨格を提示し、英語学習が効率よく、かつ、効果的に進むのを支援することを目標とする「学習英文法」提案されている。本稿では、「コントロール・サイクル」の枠組みで英語条件文に関与するコンテキストを認知言語学的に明らかにし、話し手がある事柄をどのように認識したかを検証する中で、学習英文法的観点からも貢献し得る条件文の分類を提出する。

キーワード：英語条件文、コントロール・サイクル、学習英文法、認知言語学

1. はじめに

これまで条件文は、様々な観点に基づいて分析されてきており、条件文に対する捉え方は多岐に渡る。たとえば、Huddleston and Pullum (2002: 739, 2005: 47) は、条件文を「開放条件文」(open conditional constructions) と「遠隔条件文」(remote conditional constructions) とに分類しており、Sweetser (1990: 113) は、「内容条件文」(content conditionals)、「認識条件文」(epistemic conditionals)、「言語行為条件文」(speech act conditionals) とに分類している。Dancygier (1998) は、「予測的条件文」(predictive conditionals) と「非予測的」(non-predictive conditionals) とに分類している。

他方、科学文法がいかにして言語学習、教授法、言語習得の分野に貢献できるかが近年論じられている。岡田 (2001: 6-7, 2012: 119) や大津 (編) (2012) では、(1) のような特徴をもつ「学習英文法」が提案されている。

(1) a. 科学文法 (生成文法、認知言語学、機能文法、語用論) などの成果を積極的に取り入れ、

今までばらばらに扱われてきた事実を統一的に説明する。

- b. 形を公式的・機械的にひたすら暗記させるのではなく、意味や認知メカニズムから説明することにより、学習者を納得させる。
- c. 英語学習者に英語の仕組みの骨格を提示し、英語学習が効率よく、かつ、効果的に進むのを支援する。

(2) は高校生用テキストで提示されている条件文の特徴である。

(2) a.

仮定法過去								
① 現在の事実と反対のことを仮定する言い方「もし今～なら、…なのに」								
If the mountains didn't have a lot of trees, the good oysters wouldn't grow.								
If	I	was / were	rich	,	I	could	buy	a car.
If もし	主語 ～が	動詞過去形 ～なら		,	主語 ～は	would / should could / might ～だろうに	動詞原形	

(『New World English Course II』三友社 2012: 60)

b.

仮定法：事実に対することを仮定して述べる表現。	
①	仮定法過去：(If + 主語 + 動詞の過去形 ..., 主語 + 助動詞の過去形 + 動詞の原形 ...) の形で、「もしも(今)…ならば、～するのだが[できるのだが]」などと、現在の事実に対することを仮定する。 If I were [was] rich, I could buy a big house. (もしもお金持ちなら、私は大きな家を買えるのだが。)
②	仮定法過去完了：(If + 主語 + had + 過去分詞 ..., 主語 + 助動詞の過去形 + have + 過去分詞 ...) の形で、「もしも(あのとき)…だったら、～したのだが[できたのだが]」などと、過去の事実に対することを仮定する。 If I had known his phone number, I could have called him. (もしも彼の電話番号を知っていたら、私は彼に電話をかけることができたのだが。) The Japanese might have forgotten the word if a Nobel Prize winner had not used it so often.

(『Viva English II』第一学習社 2012: 96)

(2) の特徴づけには、(1) の観点が欠如している。(2) には、(i) 主節で表される状況の細かいニュアンスの違いを捉えていない、(ii) 基本形が明らかにされていない、(iii) 実際に用いられている条件文の断片的特徴をまとめたものに過ぎない、(iv) 用いられている日本語訳の根拠が不明である、(v) ことばの運用者である話し手・聞き手の視点の言語記述になっていない、(iv) いつどのような場面で条件文が用いられるかについての観点が欠如している、といっ

た問題点が看取される。

本稿では、「コントロール・サイクル」(Langacker 2002, 2004, 2013) の枠組みで条件文に関与する先行文脈、前提、捉え方、解釈、推論、認知などの要素(すなわち、「コンテキスト」)を認知言語学的に明らかにし、話し手がある事柄をどのように認識したかを検証する中で、学習英文法的観点からも貢献し得る条件文の分類を提出する。

2. 理論背景

2.1 認識モデルと動的進展モデルにおける領域

Langacker(1991: 245-246) は、「基本的な認識モデル」(Basic Epistemic Model) によって「現実性」(reality) と「非現実性」(irreality) という領域を提出した。現実性とは、話し手にとって「現実的」(real) と認められた「状況」(situation) (もしくは「事態」(state of affairs)) と定義される。ある状況が現実性の領域に属する場合、話し手はその情報を知っていることになる。非現実性の領域には、話し手の知らない状況が属することになる。さらに、Langacker (1991: 277) による「動的進展モデル」(Epistemic Evolutionary Model) では、確実に生じるであろうと話し手に捉えられた状況を含む「投射された現実性」(Projected Reality) の領域と生じる可能性があり得ると捉えられた状況が含まれる「潜在的に可能な現実性」(Potential Reality) の領域が提出された。

本稿では、Langackerのモデルを援用し(3)の特徴で各領域を捉えておきたい。(3)では、現実性の領域の定義と非現実性の定義をより狭義なものにし、潜在的に可能な現実性の領域には未来指向的な状況だけではなく現在指向的な状況も含めている。

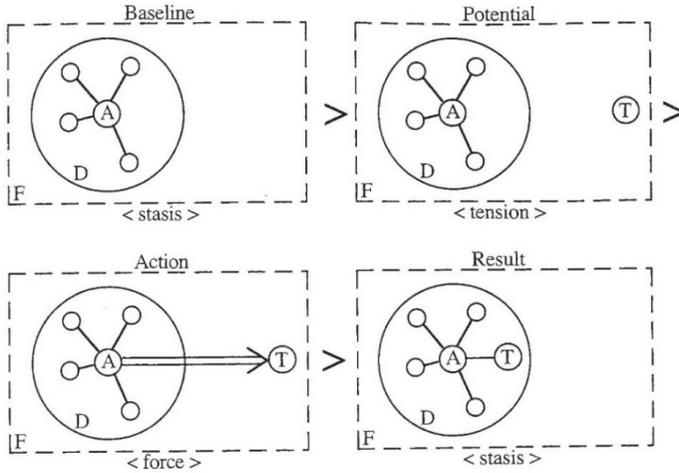
(3)

領域名	含まれる状況
現実性 (R)	(話し手が) 現在もしくは過去の事実とみなす状況
非現実性 (IR)	現在または過去の事実と反するとみなす状況
投射された現実性 (ProR)	確実に生じるとみなす状況
潜在的に可能な現実性 (PotR)	生じる／生じている可能性があるともみなす状況

2.2 コントロール・サイクル

コントロール・サイクルは、概略、4つの段階から構成され、(4)のように図示されるモデルである。

(4) コントロール・サイクル :



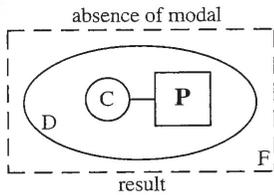
(Langacker 2002: 193, 2004: 536)

ここでのAは「行為者」(actor)を表し、Tは「ターゲット」(target)を表している。Aは、何らかの形で支配を試みようとする実体 (entity) である。Dは、行為者が支配を及ぼしている領域の「支配域」(dominion) であり、Fは、ターゲットがその場に現れた場合、行為者がその実体と交わることが可能な領域と定義される「視野」(field) である。「基盤」(Baseline) の状況は、「静的」(stasis) な状況である。たとえば、ネコ (= 行為者) が木陰で静かに横たわっている状況が、この状況に相当する。この状況において、行為者はさまざまな「実体」(entity) (小さな白丸で表示) を支配し、それぞれの実体は、行為者の支配域において確立された位置を持っている。この位置は、行為者と実体を結ぶ実線で表示されている。「潜在性」(Potential) の状況は、「緊張」(tension) の状況である。たとえば、ある猫がネズミ (= ターゲット) を見つけ、(ネズミを狙って) 身を震わせながら屈んでいる状況に当たる。この状況においては、行為者の視野にターゲットが現れ、行為者とターゲットとの交わりの可能性が生まれる。「活動」(Action) の状況は、「力」の行使が行われる状況である。たとえば、猫がネズミを攻撃する状況がこの状況に相当する。この状況における行為者は、2重矢印で表示されている力の行使においてターゲットとの関わりを持つ。「結果」(Result) の状況は、基盤の状況と同様に静的なものとなる。たとえば、ネズミが致命傷を受け、そのネズミが猫の支配下に入る状態である。この状況において、ターゲットは行為者の支配域に入り、支配の対象となる。

Langackerは、コントロール・サイクルの概念を、「[推量] や [判断] を表す」 「認識的モダリティ」(epistemic modality) を表す法助動詞の分析に応用している。まず、(5) の事例は、(6) のスキーマに関連するとしている。

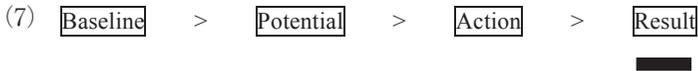
(5) Jane *is* at the wedding. (Langacker 2013: 14)

(6)



(Langacker 2004: 545, 2003: 15)

(6) のスキーマの C は話し手、P はプロファイルされている／言語化されている「作用」(process)、D は現実性の領域を表している。話し手の認識可能な範囲は F で表されている。(5) では、法助動詞が用いられていない。この場合、「Jane が結婚式にいる」ことは話し手が現実として受け入れている内容であるため、P は現実性の領域内に組み込まれている。(5) は結果段階と関連があり、コントロール・サイクル的には、結果段階がプロファイルされているとされる。このプロファイルは (7) のように図示される。

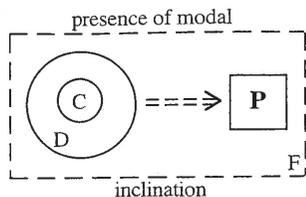


一方、(8) はどうであろうか。

(8) Jane *should* be at the wedding. (Langacker 2013: 14)

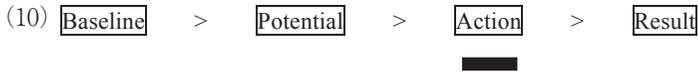
should が認知的モダリティを表している場合、「Jane が結婚式にいる」ことは、「ありそうに思われる」と話し手が捉える内容である。(8) に関連するスキーマは (9) のように描写される。ここでは、プロファイルされた作用 P は話し手にとっては事実的でないため、現実性の領域 D の外に位置づけられている。矢印は、話し手の作用 P に対しての「捉え方」(construal) / 「認知的査定」(epistemic assessment) の力を表している。

(9)



(Langacker 2004: 545, 2013: 15)

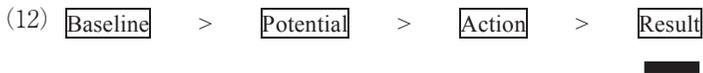
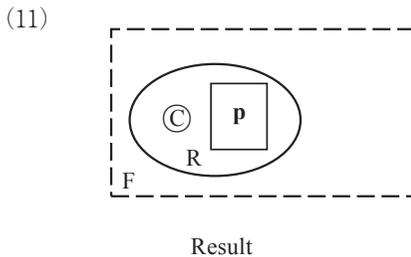
(8) には話し手Cと内容Pとの関わりが看取されることから、コントロール・サイクル的には、活動段階がプロファイルされているとされる。このプロファイルは (10) のように図示される。



3. 条件文とコントロール・サイクル

3.1 事実を述べる条件文

英語条件文はコントロール・サイクルの観点から、3タイプに分類することが可能である。1つ目のタイプの条件文は、(11) のスキーマで特徴を捉えることができる。ここでのpはif節内の状況を表している。ここで重要なことは、pが現実性の領域内に存在することである。そして、(12) に表されているように結果段階がプロファイルされるものとなる。すなわち、このタイプの条件文では、話し手は自身が発話時において事実とみなす内容をif節内で表現し、聞き手に伝える。



このスキーマで捉えられる条件文は、「性質・習慣を表す条件文」(澤田 2014)、「総称的条件文」(generic conditionals) (Dancygier 1998: 63, Dancygier and Sweetser 2005: 95ff.)、「事実的命題の条件文」(Factual-P conditionals) (Declerck and Reed 2001: 67ff.) と呼ばれてきた条件文に相当する。(13) を考えてみよう。

(13) “Dale, Arnie’s dairy hand, he says it’s some special calf the Jews need for their prayers;” Herb Longnecker said.

...

“That must be why we’re not reading about it on the Web site,” Peter chortled.
“Usually, if Junior makes a tackle or Arnie blows his nose, she trumpets it all over the Internet.”

(S. Paretzky, *Bleeding Kansas*) (斜体筆者)

(14) “Papi could sleep with his cousin Rafi,” Clara offered. “He does, sometimes, if the weather is too bad for him to make it home. Rafi lives in Bensenville, up by the airport.”

(S. Paretzky, *Body Work*) (斜体筆者)

(13) では「ジュニアがタックルを決める／アーニーが洩をかむ」→「マイラがネットで自慢しまくる」という事実的内容が述べられ、(14) では「天気が悪く家に帰ることができない」→「よくパパはラフィのところに泊まる」という事実的内容が述べられている。

このタイプの条件文において話し手は、発話時以前から事実として見なしているif節の内容を述べている。第一に、条件節の時制は「後方転移」(backshift) されない。(13) と (14) の makes・blows と is は、それぞれ (15) と (16) のような独立文と同じように解釈される。

(15) Junior *makes* a tackle or Arnie *blows* his nose.

(16) The weather *is* too bad for him to make it home.

後方転移が関与しないため、このタイプの条件文は (17) の「基本形」には当てはまらない。

(17)

‘first conditional’

if + present

If we play tennis

will + infinitive

I’ll win.

‘second conditional’

if + past

If we played tennis

would + infinitive

I would win.

‘third conditional’

if + past perfect

If we had played tennis

would have + past participle

I would have won.

(Swan 2005: 233)

事実を述べる条件文の「AならB」の内容が事実的であることは、このタイプの条件文

の if が事実的内容を導入する when や whenever 用いてパラフレーズ可能であることから裏づけられる (cf. Dancygier 1998: 64)。(13) と (14) はそれぞれ (18) と (19) に言い換えられる。

(18) *Whenever* Junior makes a tackle or Arnie blows his nose, she trumpets it all over the Internet. (= (13))

(19) He does, sometimes, *when* the weather is too bad for him to make it home. (= (14))

また、主節の現在時制は「習性」を表す will + 不定詞に置き換えることができる (cf. Cowan 2008: 451, 澤田 2014)。

(20) If Junior makes a tackle or Arnie blows his nose, she *will trumpet* it all over the Internet. (= (13))

(21) He *will* (do), if the weather is too bad for him to make it home. (= (14))

(22) – (27) の事例も同様である。

(22) If Mrs. Dugan *couldn't come* to the phone (which was often the case) , Muriel *talked* to Claire instead. (Dancygier and Sweetser 2005: 95)

(23) He *gets* angry if I *leave* the house. (Dancygier and Sweetser 2005: 95)

(24) If I *had* a problem, I always *went* to my grandmother. (Declerck and Reed 2001: 67)

(25) If the temperature *falls* below 32 degrees Fahrenheit, water *freezes*.

(26) If she *is* his bridge partner, they (usually) *lose* big.

(27) If he *had* business in Baltimore, he (usually) *stayed/would* at Hyatt.

((25) – (27) : Cowan 2008: 450)

このタイプの条件文の特徴を (28) のようにまとめておきたい。

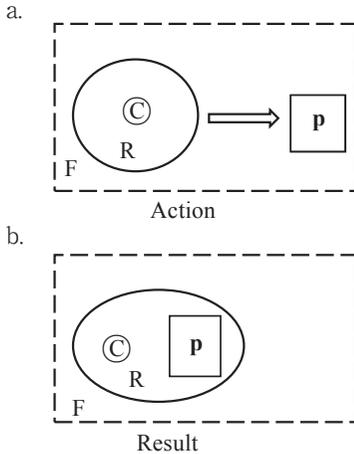
(28) 事実を述べる条件文：

話し手は「AならB」(A=if節の内容、B=主節の内容)という(総称的、習慣的、性質的)事実を聞き手に伝える。「英語条件文の基本形」の型はとらず、if節の動詞の時制をずらさない。

3.2 条件節の内容を想定する条件文

2つ目のタイプの条件文では、(29a) で示されるように、話し手は条件節の内容 p に心的アクセスを施し、(29b) のように、その内容を現実領域に取り込む心的操作を行う。プロファイルされるコントロール・サイクルのステージは、Action と Result の両者となる。

(29)



(30) **Baseline** > **Potential** > **Action** > **Result**

このタイプの条件文では、典型的には話し手は聞き手から提示される if 節の内容 p を一時的に事実として取り込み、その内容をもとに、「p というのなら...」と述べる。「伝聞を表す条件文」(澤田 2014)、「非予測的条件文」(non-predictive conditionals) (Dancygier 1998: 63, Sweetser and Dancygier 2005: 95ff.)、「閉じられた命題の条件文」(Closed-P conditionals) (Declerck and Reed 2001) がこのタイプの条件文に相当する。次例参照。

(31) Lara blinked, trying to Imagine a teenage Myra. “She’s about a hundred years old, and she’s like a witch!”

...

“But if she’s a witch, as you say, she and I are kindred spirits, and she belongs at our ceremony,” Gina said in the aloof, mocking voice she’d used when Lara and Susan first saw her. “Perhaps I’ll call on her and issue a formal invitation.”

(S. Paretsky, *Bleeding Kansas*) (斜体筆者)

(32) “Oh Grace,” moans the Governor’s wife. “I thought better of you! All these years you have deceived us!”

The voice is gleeful. “Stop talking rubbish,” she says. “You’ve deceived yourselves! I am not Grace! Grace knew nothing about it!”

…

“You are not Grace,” says Simon. Despite the warmth of the room, he feels cold all over. “*If you are not Grace, who are you?*”

(M. Atwood, *Alias Grace*) (斜体筆者)

(31) では、話し手はラーラの「(マイラは) 魔女みたい」という発言を聞いている。下線部の条件文の発話者であるジーナは、その情報をとりあえず事実として想定し、「彼女 (=マイラ) は魔女であるというのなら、私の同類だわ」と述べている。(32) では、話し手のサイモンはif節中の内容「君がグレイスではない」という状況を一旦は取り入れ、(そうであると言うのなら) 「君は誰だね」と続けている。

話し手がif節の内容を事実として取り入れていることは、まず、(31) – (32) の条件文はif it is trueを用いてパラフレーズ可能であることから裏づけられる (cf. Huddleston and Pullum 2002: 191, Swan 2005: 237)。

(33) *If it is true that she’s a witch, she and I are kindred spirits, and she belongs at our ceremony.* (= (31))

(34) *If it is true that you are not Grace, who are you?* (= (32))

第二に、if節の時制は後方転移されず、(31) と (32) のisとareは (35) – (36) のように独立文における場合と同じように解釈される。後方転移が関与しないため「基本型」を取らない。

(35) She *is* a witch.

(36) You *are* not Grace.

事実を述べる条件文との違いは、if節内の状況は、話し手が事実として一時的に取り込んだ内容であって、話し手が事実として前から知っている総称的、習慣的、性質の特徴を有さないことにある。これは、このタイプの条件文のifはwhenやwheneverと置き換えることができないことから支持される (cf. Akatsuka 1985: 340-341, Declerck and Reed 2001: 85)。

(37) But *{when/ whenever}* she's a witch, as you say, she and I are kindred spirits, and she belongs at our ceremony. (≠ (31))

(38) *{When / Whenever}* you are not Grace, who are you? (≠ (32))

(31) – (32) に例示されるように、話し手がif節内で事実として想定する内容はあらかじめ相手が主張したものであることが多い (cf. Comrie 1982, Akatsuka 1986: 339, Declerck and Reed 2001: 84, Dancygier and Sweetser 2005: 88, 澤田 2006: 122-127, 長友 2009: 26, etc.)。

(39) A: Oh, he's sure to be better tomorrow.

B: If he'll get better by tomorrow, I won't cancel our theater tickets.

(Dancygier and Sweetser 2005: 88)

話し手Bは、話し手Aの情報を聞いて、その情報を基に「チケットはキャンセルをしない」という決意表明をしており、if節の内容はあらかじめ話し手Aが主張したものとなっている。

(40) If she is giving baby a bath, I'll call back later. (Dancygier 1998: 111)

Dancygier (1998: 111) によれば、(40) も「彼女は赤ちゃんをお風呂に入れている」という電話相手の発話を聞いて、話し手が述べたような文であるとされる。よって、(40) には、as you sayといった表現が挿入可能である。

(41) If, *as you say*, she is giving baby a bath, I'll call back later. (Dancygier 1998: 111)

(42) も同様である。if節の内容の「お金がない」は、あらかじめリンが述べた「十分なお金がない」という同様の内容を繰り返すものとなっている。

(42) To his surprise, she asked calmly, "Do you have the money?"

"No, I only have six hundred in the bank. Don't you have some savings?"

"Yes, a little." She didn't tell him the amount which he was eager to know.

"Maybe we can borrow some from others if we decide to do it," he said. "What do you think?"

After a pause, she said, "*If you don't have the money, don't think about it.*" She

frowned and her lips tightened.

(H. Jin, *Waiting*) (斜体筆者)

一方で、(43) – (44) のような例も見られる。

(43) If you need any help, my name is Ann. (Dancygier and Sweetser 2005: 113)

(44) If you're hungry, there are biscuits on the sideboard.

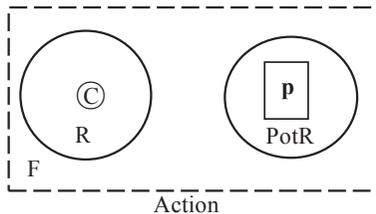
(Austin 1961; qtd. in Dancygier and Sweetser 2005: 113)

これらの事例に関してDancygier and Sweetser (2005: 113) は (45) のように述べている。

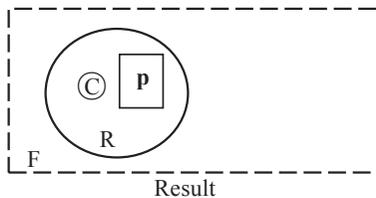
(45) The speaker accesses a context in which it is possible that the hearer may need help (or, in the original Austin [1961] example ..., a context in which he may be hungry).

すなわち、(43) では、話し手は「援助が必要である」といった潜在的に可能な状況を前提として聞き手に「私の名前はアンです」と述べており、(44) では、「お腹をすかせている」といった潜在的に可能な状況を前提として、聞き手に「食器棚にビスケットがありますよ」と述べていると考えられる。よって、(46) に図示されるように、話し手は潜在的に可能な現実性の領域に存在する if 節の内容 P を現実性の領域に一旦取り入れている。

(46) a.



b.



現実性の領域に話し手がif節の内容を取り入れていることは、(43) – (44) は if it is true that

で置き換え可能であることから示唆される。

(47) *If it is true that you need any help, my name is Ann.* (= (43))

(48) *If it is true that you're hungry, there are biscuits on the sideboard.* (= (44))

(49) の事例も同様である。

(49) I called Rivka on my cell phone. We had a short, annoying conversation. She wouldn't say one way or another if Karen was there, even when I said that the Artist's life was at risk.

"You weren't in the club tonight," I said, "but a gang of serious thugs attacked her at the end of the performance. She managed to get away, but *if she's with you, you need to call the cops*. One of the creeps is in front of your building, so *if she's there, don't let her leave without a police escort*. If he doesn't want the cops, call me. Do you hear?"

(S. Paretsky, *Body Work*) (斜体筆者)

波線部分の文脈から明らかなようにif節内容は、聞き手のリヴカによって発せられていない。そうではなく、「彼女があなたと一緒にいる」という現在起こっている可能性がある状況をif節内で表現して、それを前提として「必ず警察に電話して」／「警察の護衛なしで外に出たりしてはだめ」と述べている。(49)の下線部の条件文はif it is true thatを用いてパラフレーズ可能であり (= (50))、if節内の動詞は独立文と同じように解釈され (= (51))、ifはwhenやwheneverと置き換えることができない (= (52))。

(50) a *If it is true that she's with you, you need to call the cops.* (= (49))

b. *If it is true that she's there, don't let her leave without a police escort.* (= (49))

(51) a. She's with you.

b. She's there.

(52) a. {*When / Whenever*} she's with you, you need to call the cops. (≠ (49))

b. {*When / Whenever*} she's there, don't let her leave without a police escort. (≠ (49))

以上を踏まえ、(53)にこのタイプの条件文の特徴をまとめておきたい。

(53) 条件節の内容を想定する条件文：

話し手はif節の内容を一時的に想定し「AであるというのならB」(A=if節の内容、B=主節の内容)と話し手の想定世界を述べる。「英語条件文の基本形」の型はとらず、if節の動詞の時制をずらさない。

3.3 潜在的に可能な現実と非現実を述べる条件文

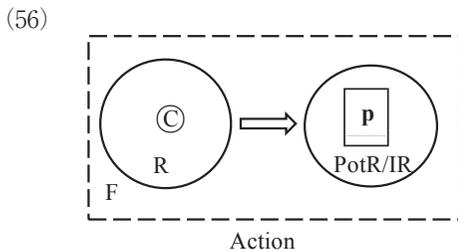
まず、Palmer (2001: 207) による条件文に関する見解を見ておきたい。Palmer は、(54) の条件文を挙げ、(55) のようにその特徴を述べている。すなわち、if節の内容に対して話し手はある種の心的査定を行っており自身の捉え方を表明している。

(54) a. If John *comes*, Bill *will* leave.

b. If John *came*, Bill *would* leave. (Palmer 2001: 207)

(55) 後者においては、話し手がif節内で表される状況に対してある種の否定的態度を表している。すなわち、話し手はif節内の状況「ジョンがくること」の実現可能性に関しての疑念を表しているのである。(Palmer 2001: 207)

(56) のように、(54a) と (54b) では、それぞれ、潜在的に可能な現実性の領域と非現実の領域に属するif節の内容に心的操作を施していると考えることができる。



(54) のタイプの条件文においては、(56) で表されるように、if節の内容を現実として取り込むといった心的操作は関与しない。事実、(54) は (57) のように、if it is true でパラフレーズすることができない。

(57) a. *If it is true that* John comes, Bill will leave. (≠ (54a))

b. *If it is true that* John came, Bill would leave. (≠ (54b))

(58) **Baseline** > **Potential** > **Action** > **Result**

このタイプの条件文は英語の基本形をとる。「if … 現在形…, … will + 原形 …」の型をとる条件文の場合、話し手はif節の内容は、潜在的に可能な領域に属するものとなる。

(59) Sue: I think I left my watch at your house. Have you seen it?

Ann: No, but I'll look when I get home. If I *find* it, I'll tell you.

(Murphy 2009: 72)

アンはスーの「あなたの家に腕時計を忘れた」という発話を聞いている。そのため、if節の内容の「私がそれを見つける」ことはアンが「生じる見込みがある」とみなす状況である。

条件文が「if … 遠隔形…, … would + 原形 …」の型や「if … had + pp. …, … would + 完了形」の型をとる場合、if節の内容は非現実の領域に属する。

(60) (I don't have enough money.) If I *had* enough money, I *would* buy a car.

(Azar 2002 : 221)

(61) (I'm sure Amy will lend you the money.) I'd be very surprised if she *refused*.

(Murphy 2009: 73)

(62) (I wasn't hungry.) If I *had been* hungry, I *would have eaten* something.

(Murphy 2009: 76)

(60) では、十分なお金を持っていないという事実が成立している。そのため、if節内の「私が十分なお金を持つこと」ことは現在の事実と反する状況である。(61) では、話し手はエイミーがお金を貸してくれると予測している。よってif節の内容「エイミーが拒むこと」は話し手にとって生じる見込みのない状況である。(62) では、話し手はお腹をすかせていなかったという過去の事実が成立している。そして、if節では過去の事実と反する「(あの時)私がお腹をすかせていたら」という仮定が述べられている。

このタイプの条件文の場合、if節の内容は話し手の現実には取り込まれていない。(63) を考えてみよう。

(63) "Promise me then that you and Manna Wu will have no abnormal relationship unless you have divorced your wife and married her." By "abnormal" he meant "sexual."

For half a minute Lin remained silent. Then he raised his head and muttered, “I promise.”

“You know, Lin. I have to do this. *If you break any rule, I won't be able to protect you...*”

(H. Jin, *Waiting*) (斜体筆者)

斜字体部の発話は、聞き手（リン）がルールを守ることを約束した直後に発せられているため、if節内の内容の「きみがルールを破る」ことは話し手にとって事実的なものにはならない。

事実、前出（59）-（62）の条件文は、If it is true that …で置き換えることができない。

(64) *If it is true that I find it*, I'll tell you. (≠ (59))

(65) *If it is true that I had enough money*, I would buy a car. (≠ (60))

(66) I'd be very surprised *if it is true that she refused*. (≠ (61))

(67) *If it is true that I had been hungry*, I would have eaten something. (≠ (62))

また、このタイプの条件文のif節の動詞の時制は「後方転移」(backshift) されており、if節は独立文と同じように解されない。

(68) I find it. (≠ (59))

(69) I had enough money. (≠ (60))

(70) She refused. (≠ (61))

(71) I had been hungry. (≠ (62))

以上を踏まえ、このタイプの条件文の特徴を（71）のようにまとめておきたい。

(71) 潜在的に可能な現実と非現実を述べる条件文：

話し手は、「生じる見込みがある」／「生じる見込みがない」／「現在の事実に反する」／「過去の事実に反する」とみなす内容を述べる。「英語条件文の基本形」の型をとり、if節の動詞の時制をずらす。

4. 終わりに

本稿では、認知言語学的観点から条件文に関与するコンテキストを明らかにする中で、学習英文法的観点から貢献し得ると思われる条件文の分類（すなわち、「事実を述べる条件文」、「条

件節の内容を想定する条件文]、「潜在的に可能な現実と非現実を述べる条件文]とそれらの特徴を提出した。本研究は条件節の内容に対する話し手の認知や捉え方や心的操作に主眼を置いたものである。次の例を見られたい。

(72) If Mary goes, John will go.

(73) If she's divorced, (then) she's been married.

(74) If I may say so, that's a crazy idea.

((72) – (74) : Sweetser 1990)

Sweetser (1990) によれば、(72) では、if 節内の状況の実現が主節の実現の十分条件となっており、(73) では、if 節内の内容が真であることを知ることが、主節の内容が真であると結論するための十分条件となっており、(74) では、if 節内の事態は主節の言語行為を可能にするものとなっている。このように、条件文の包括的な本質的理解には、主節と従属節との接続のあり方の視点も不可欠である。条件文の接続のあり方をどのように学習英文法の枠組みで特徴づけるべきか、さらに考究していきたい。

* 本稿は、平成26年10月24日「第6回言語フォーラム」ならびに平成27年2月20日「第1回 IRI 言語・文化研究フォーラム」における発表内容に加筆修正を施したものである。本研究は学術研究助成基金助成金（基盤研究（B）2330100・基盤研究（C）25370565）及び IRI 共同研究プロジェクト研究助成金の助成を受けている。

参考文献

- Akatsuka, N. 1985. "Conditionals and the Epistemic Scale." *Language* 61(3): 625-639.
- Austin, J. L. 1961. "Ifs and Cans." In Urmson J. O. and G. J. Warnock (eds.), *J. L. Austin, Philosophical Papers*. Oxford: Oxford University Press. 153-180.
- Azar, B. S. 2002. *Fundamentals of English Grammar*. Third Edition. New York: Longman.
- Comrie, B. 1982. "Future Time Reference in the Conditional Protasis." *Australian Journal of Linguistics* 2: 143-152.
- Cowan, R. 2008. *The Teacher's Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, B. 1998. *Conditionals and Prediction: Time, Knowledge and Causation in Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, B. and E. Sweetser 2005. *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. Cambridge:

- Cambridge University Press.
- Declerck, R. and S. Reed 2001. *Conditionals: A Comprehensive Empirical Analysis*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Huddleston, R. D. and G. K. Pullum 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*. (Vol. II). *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 2002. "The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death." *Proceedings of the 2nd Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 2: 193-220.
- Langacker, R. W. 2004. "Aspects of the Grammar of Finite Clauses." In Achard, M. and S. Kemmer (eds.), *Language, Culture and Mind*. Stanford: Center for the Study of Language and Information. 535-577.
- Langacker R. W. 2013. "Modals: Striving for Control." In Marín-Arrese, J. L., M. Carretero, J. Marta Arús Hita, and J. van der Auwera, (eds.), *English Modality: Core, Periphery and Evidentiality*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Murphy, R. 2009. *Grammar in Use Intermediate*. Third Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- 長友俊一郎 2009.『束縛的モダリティと英語法助動詞』東京：リーベル出版。
- 岡田伸夫 2001.『英語教育と英文法の接点』京都：美誠社。
- 岡田伸夫 2012.「学習英文法の内容と指導法」大津由紀雄（編）『学習英文法を見直したい』（106-119）東京：開拓社。
- 大津由紀雄（編）2012.『学習英文法を見直したい』東京：開拓社。
- Palmer 2001. *Mood and Modality*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- 澤田治美 2006.『モダリティ』東京：開拓社。
- 澤田治美 2014.『現代意味解釈講義』東京：開拓社。
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. Third Edition. Oxford: Oxford University Press.
- Sweetser, E. E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: University of Cambridge Press.

(ながとも・しゅんいちろう 英語国際学部准教授)